



# 赤谷の森から

赤谷森林ふれあい推進センター

【最近のトピックスをまとめてみました】

## ニホンジカの低密度管理について

赤谷プロジェクトでは、2008年から赤谷の森全域を対象に、哺乳類相のモニタリング調査を実施しています。その結果、ここ10年間でニホンジカが出現した地点数は約14倍、頻度は最大で約21倍にまで増加しました。また直近では、三国峠のニッコウキスゲ群落が摂食を受けるなど、部分的ではあるものの、植生への影響が出始めています。このままではいずれ高密度になり、対策に大きなコストが掛かるとされることから、プロジェクトでは、低密度の段階で個体数を管理する試みを行っています。2018年から、くくり罠による誘因捕獲試験（誘引には鉤塩を使用）を実施し、初年度は6基13日間の稼働で1頭、次年度は13基41日間の稼働で3頭を捕獲しています。3年目となる今年は、事前にモニタリングした8箇所から、ニホンジカが特に多く出現した5箇所を選定し、1箇所につき3基の計15基を22日間稼働させました。結果、期間中に少なくとも2回はニホンジカが罠を踏み抜きましたが、うまく作動しなかったことや、作動しても罠ごと持って逃げられるなどしたため、捕獲頭数は残念ながら0頭となりました。来年は、今回の経緯を踏まえて、設置の仕方を入念に調整するとともに、稼働期間も増やすなどして確実な捕獲に結び付けたいと考えています。



くくり罠の設置



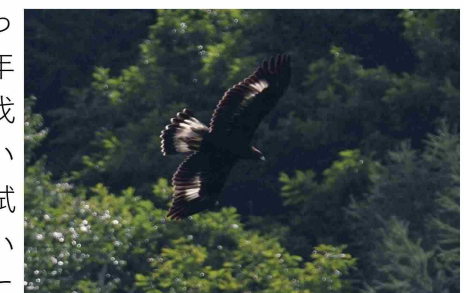
鉤塩に誘引されたシカ

## イヌワシの繁殖サポートについて

森林生態系の頂点に君臨し、国の天然記念物に指定されているイヌワシ。国内においては、近年、餌不足や生息環境の悪化などを理由にその数を急速に減らしつつあります。赤谷の森にも、現在イヌワシがひとつがい生息しており、90年代前半からモニタリング調査が行われていますが、2010年からは6年連続で繁殖に失敗するなど、繁殖成功率の低下が懸念されています。そうした背景から、プロジェクトでは、イヌワシの繁殖をサポートすべく、人工林を伐採することによる「狩場づくり」を行っています。2015年からスギの人工林を継続的に皆伐し、2019年までに約3.6ha、今年は9月に約0.7haについて実施しました。伐採初年度から数えて5年目の今年は、営巣地の移動も関係しているものの、試験地周辺へのイヌワシの出現頻度が最も高く、試験地での狩り行動の回数も、伐採面積の増加とともに増えていることが確認されています。加えて、2016年、2017年は繁殖にも成功し、今年も6月下旬に幼鳥の巣立ちが確認されたことで、ここ5年間における繁殖成功率は6割となりました。試験地が、どれほど繁殖に影響しているか定かではないですが、狩場として利用しているのは、確実なようですから、今後も伐採を計画しつつ、イヌワシのよりよい生息環境づくりに取り組んでいきます。



今年伐採したイヌワシの狩場試験地



今年誕生したイヌワシの幼鳥

## 赤谷の森自然散策(秋)について

赤谷プロジェクトでは、環境教育WGの一環として、春、夏、秋、冬の年4回にわけて「赤谷の森自然散策」を行っています。今年は、コロナウイルスの関係で春、夏は中止となりましたが、秋については募集区域を利根沼田区域に限定し、募集人員も20名と縮小して行いました。開催日は11月24日(土)、錦秋に染まるブナやミズナラの樹々を観察しながら、群馬県側三坂線入口から新潟県側駐車場までの旧三国街道(国有林)を散策するコースです。散策後には、猿ヶ京に古くから伝わる民話語りや紙芝居を鑑賞します。みなかみ町(エコパーク推進室)との共催で行っているもので、募集すれば直ぐに定員に達する人気を誇っております。

当日は天候にも恵まれて、いい散策日和となりました。3班に分かれ1班のガイドは長浜陽介さん、2班は石坂忠さん、3班は石飛誠さんが担当し、それぞれ持ち味を発揮して参加者に説明をしていました。今回は地元のみながみ町、沼田市の人だけでしたが、「春・夏が中止になり心配していたが開催されて良かった。」「紅葉が美しくとても良かった。また、違う季節に来てみたい。」などの感想が聞かれ、いい思い出になったと思います。

最後に、赤谷の森自然散策会(冬)が令和3年2月11日(木)に予定されております。コロナウイルスがまた流行ってきており開催の実施については検討を要するとは思いますが、開催の有無が決まりましたらホームページ上でお知らせしますので宜しくお願いします。



赤谷の森自然散策(秋)集合写真



参加者に説明する長浜さん



## 日本で現在栽培されているきのこ Part4



### アラゲキクラゲ (キクラゲ科 キクラゲ属)

3月下旬から9月上旬に河川敷の柳などの広葉樹の枯木に群生する。  
カサはゼラチン質で径5cm～8cmで表面は茶褐色から茶色で白色の細かい微毛があり、裏側は細かい管孔になっている。  
柄はほとんど無い。  
分類的には子囊菌類に分類される。  
商品名はキクラゲで販売されている。



### ハナビラタケ (ハナビラタケ科 ハナビラタケ属)

7月上旬から9月中旬に針葉樹の伐根や立ち枯れ木、主にカラマツに単生から散生する。  
カサは始め鮮黄色後に白色になり扇形で径2cm～4cmで縦に重なり塊になり、裏面は管孔です。  
柄は5cmでカサと同色です。  
βカロチンを多く含んでいるきのこです。



### ヤマブシタケ (サンゴハリタケ科 サンゴハリタケ属)

9月下旬から10月中旬に広葉樹の立ち枯れ木に単生する。  
子実体は白色で次第にクリーム色になり老成すれば、淡黄褐色を帯びる。  
カサや柄は形成されず、ゆがんだ球塊状で径8cm～2.5cmで太く長い針状の集合体です。  
針は柔らかくもろい肉質で折れやすい。

